

[研究ノート]

パーリ文献中の *adhimutti* について
—— *hīnādhimuttika* / *hīnādhimutta* の事例から ——

古川 洋平

On *adhimutti* in the Pali Literature:
From the Examples of *hīnādhimuttika* / *hīnādhimutta*

Yohei, Furukawa

In this paper, I examined the character of *adhimutti* (Skt. *adhimukti*) by paying attention to the examples of *hīnādhimuttika* / *hīnādhimutta* used in the Pali literature of the Theravāda Buddhism.

Looking at the example of using *hīnādhimuttika* / *hīnādhimutta* as a word derived from Tatpuruṣa, it is considered that “inferior” (*hīna*) refers to something that does not lead to liberation or nirvana (*Brahmaloka*, *kāmaguṇa*, etc.).

And I also pointed out that Vibh-a et al. understand *ajjhāsaya* (= *adhimutti*) as a mental element rather than an act or a work of the mind by referring to the *Dhātusamyutta* in the Pali Canon. According to Pali commentaries, it is *adhimutti* that determines, for example, that a person *sīlavant* approaches only *sīlavant*.

The cases of *hīnādhimuttika* / *hīnādhimutta* in the Pali literature show the following. *adhimutti* has the aspect of “work of the mind” that sets one’s mind to the inferior thing (*hīna*) and has the aspect of “mental element” of a person who proactively approaches only those who have the same inferior (*hīna*) *adhimutti*. In short, *adhimutti* in the Pali literature is used from two different aspects: mental behavior and temperament.

キーワード : *adhimutti*, *adhimukti*, *hīnādhimutti*, *hīnādhimukti*, 信解

0. はじめに⁽¹⁾

本研究ノートは、パーリ聖典を伝承する上座部大寺派における *adhimutti* (Skt. *adhimukti*) について、特に *hīnādhimuttika* / *hīnādhimutta* に関連する経及びその註釈理解に焦点を当てるものである。

adhimutti は、サンスクリット語 *adhi-√muc* を語源とする語で「志向」「決意」等と訳され (Cf. CPD s.v. *adhimuccati*)、漢訳語としてはしばしば「信解」が使用される。本語は同語源の *adhimokkha* (Skt. *adhimokṣa*) とともに⁽²⁾、「信」を意味するサンスクリット語 *śrad-√dhā* を語源とする語の類義語の一つとして言及されることが多い。もっとも、*adhi-√muc* を語源とする語は多義的な側面をもっており (Cf. [Horner 1959: Translator's Introduction] etc.)、「信」の意味に止まらない多様な性格が認められる⁽³⁾。パーリ聖典において本語が「信」の意味で使用されていると言える用例は、全体の一部に過ぎない。

これまでの研究において、*adhi-√muc* を語源とする語には凡そ、①対象に心を向け、固定する「志向」「固定」の側面の他 (M I, p. 186 etc. Cf. Ps II, p. 225)、②疑いなく「これ以外にはない」と心を決める「決意」「確信」としての側面 (S II, p. 84 etc. Cf. Spk II, p. 81)、③事柄の実現に関与する側面 (Vin I, p. 209, S I, p. 116 etc.)⁽⁴⁾が指摘されている ([芳村 1987], [櫻部 1997: 34-39], [Benedetti 2019])。とはいえ、厳密に区別できるわけではなく、パーリ文献中に見られる本語は、これら3つの側面を含めた様々なニュアンスを帯びつつ用いられているのが実情である⁽⁵⁾。その意味で、*adhimutti* には未だ明らかにすべき点が残されていると言える。

本研究ノートでは、パーリ文献中の *hīnādhimuttika* / *hīnādhimutta* に関連する用例を整理する中で *adhimutti* の性格を明らかにする一助とするとともに、両語を考察するにあたっての地ならしをしたいと考える。*hīnādhimuttika* には、語形上「劣った志向をもつ [者]」という *Karmadhāraya* (Kdh.) 由来の *Bahuvrīhi* (Bv.) の他、「劣ったものへの志向をもつ [者]」という *Tatpuruṣa* (Tat.) 由来の Bv. 理解も想定され、実際、註釈にも2つの解釈が確認で

きる⁽⁶⁾ (*hīnādhimutta* も同様)。以下、まず、パーリ聖典中の Tat. 由来の Bv. を支持する事例を取り上げる (⇒1.1.)。次いで、S 14.14-16に共通する *hīnādhimuttika* の記述を紹介した上で (⇒1.2.)、論蔵以降の本経を軸とした展開を概観していく (⇒2.)。時系列的に資料を追う性格上、多少雑多な内容となるが、了とされたい。

1. パーリ聖典中の *hīnādhimuttika* / *hīnādhimutta*

1.1. Tat. 由来の Bv. を支持する事例

パーリ聖典中の用例を整理すると、*hīnādhimuttika* / *hīnādhimutta* の事例は、それほど多くはない。もっとも、*adhimutti* / *adhimutta* が複合語の後分として使用されるケースでは、複合語の前語に形容詞、特に *hīna* などが用いられる場合は Kdh., Tat. どちら由来の Bv. にも解釈可能であり、文脈や註釈理解などから判断するしかない。以下、Tat. 由来であることを支持する用例をいくつか取り上げる。

パーリ聖典中の *hīnādhimuttika* は、常に *kalyāṇādhimuttika* あるいは *pañītādhimuttika* と対で使用される。A 6.85には、比丘がそれらを具えることで冷たい状態 (涅槃) を目の当たりにすることが出来ない／出来る6つのものが列挙されており、それぞれに *hīnādhimuttika* / *pañītādhimuttika* となることが含まれている (A III, p. 435: ... *hīnādhimuttiko* / *pañītādhimuttiko* ca hoti, ...)。Mp-ṭ によると、後者の *pañītādhimuttika* は「勝れた最上の道果 (阿羅漢果) に志向している者」と Tat. 由来で理解される⁽⁷⁾。本例は、*hīnādhimuttika* であるうちは解脱・涅槃が達成されない一方、*pañītādhimuttika* となることが解脱・涅槃の条件であることを示している。*pañītādhimuttika* の註釈理解から対で使用される *hīnādhimuttika* の「劣ったもの」(*hīna*) を考えると、ひとまず解脱・涅槃に導かず、結びつかないもの一般であると想定できる。では、ここの「劣ったもの」とは、具体的にはどういったものなのであろうか。以下、*hīnādhimutta* に関する A の事例を見てみよう。

A 8.35は、8種の布施による良き転生を説く。本経では、王族やバラモ

ン乃至梵衆天の8つそれぞれの者達が生まれを享受しているのを見た者が、
各々の転生先に生まれることを願う（以下、梵衆天のケースを引用）。

〈用例①〉

tassa evaṃ hoti: aho vatāhaṃ kāyassa bhedaṃ paraṃ maraṇā Brahmakāyikānaṃ
devānaṃ saḥavyataṃ upapajjeyyan ti. so taṃ cittaṃ dahati, taṃ cittaṃ
adhiṭṭhāti, taṃ cittaṃ bhāveti. tassa taṃ cittaṃ hīne 'dhiṃuttam'⁽⁸⁾, uttari
abhāvitam, [tatrūpapattiyā samvattati.]⁽⁹⁾ kāyassa bhedaṃ paraṃ maraṇā
Brahmakāyikānaṃ devānaṃ saḥavyataṃ upapajjati. (A IV, p. 241)

（釈尊）「彼（施者）は次のように思う。「ああ、私は身体の破壊から死
後、梵衆天と共にある状態に至りたい」と。彼はその心を置く。彼はそ
の心を固く置き定める（加持する）。彼はその心を修習する。彼のその
心が劣ったもの（≡梵衆天）に adhi-√muc（志向）すると、さらに修習
されなければ、〔そこ（梵衆天）に生じるために働く。〕彼は身体の破壊
から死後に梵衆天と共にある状態に至る⁽¹⁰⁾」。

上掲例は梵衆天の事例であるが、他の転生先の場合も全く同様である。こ
こで adhi-√muc が向けられる「劣ったもの」（hīna）とは、施者が望む梵衆
天などの転生先を示すと考えられる（註釈は五種欲で説明）。また、本語は
施者が心を置き、固く置き定め（加持し）、修習する文脈で使用されてお
り、adhi-√muc することが梵衆天への転生に結びついている（その際、さ
らなる修習を止めるという条件が付される）。本例は、冒頭で取り上げた
adhi-√muc を語源とする語の事柄の実現に関与する側面を示している。

次に M 97 の事例を取り上げる。ある日、重篤に陥ったダーナンジャーニ
はサーリプッタに慰問を願う。慰問の中でサーリプッタは、ダーナンジャー
ニに対し梵天界に転生するための四無量心の修習を説いた。後に釈尊はサー
リプッタに、ダーナンジャーニに「さらに為すべきことがあるにも拘らず」
(sati uttarikaraṇīye)、なぜ彼を「劣った梵天界」（hīna Brahmaloaka）に止め置

いて立ち去ったのかと問い、「優れたもの」としての解脱・涅槃に導くべき
であった、という立場を暗示する。サーリプッタは釈尊の問いに対し、ダー
ナンジャーニが梵天界に adhi-√muc している（Brahmalokādhimutta）ことが
分かったためであると述べている（彼は死後梵天界に生まれている）（M II,
pp. 195-196）。

本例の理解に関して M 105 では、世俗的な利益・不動・無所有処・非想
非非想処・涅槃の5つそれぞれに adhi-√muc した者が、それぞれの対象より
も優れたもの話（世俗的な利益の場合は不動）であっても、耳を傾けな
くなっている⁽¹¹⁾（注下線部②）。M 97 のケースでは、余命幾ばくもない中で
ダーナンジャーニが梵天界に adhi-√muc しており、梵天界よりも優れたもの
に心が向いていないことが分かったために、彼の意向を尊重する形で四無量
心が説かれたと推察される⁽¹²⁾。

以上、パーリ聖典中の hīnādhimutta が Tat. 由来として使用されることを支
持する用例を取り上げた。これらの用例で具体的に「劣ったもの」とされて
いるのは、五欲を享受するような境涯を含む、天界等の良き転生先である。
或る転生先（劣ったもの）に adhi-√muc することは、修習を通して、あるいは
修習を止めることでその転生の実現に結びつく面を有している（その他
Cf. M III, p. 147）⁽¹³⁾。

1.2. S 14.14-16

続いて S 14 (Dhātusaṃyutta) 中の hīnādhimuttika の事例を検討する。本
Saṃyutta は dhātu（要素）をテーマとしており⁽¹⁴⁾、中でも S 14.14-16 の3
経（S 14.16 は It 78 とパラレル）は、hīnādhimuttika を集中的に使用する。後
に確認するように、S 14.13 以降の本 Saṃyutta の dhātu は、伝統的に経中の
adhimutti をさすと理解されている⁽¹⁵⁾。以下、3 経に共通して使用される記
述を提示する。

〈用例②〉

dhātuso bhikkhave sattā saṃsandanti samenti. **hīnādhimuttikā** sattā **hīnādhimuttikehi** saddhiṃ saṃsandanti samenti; kalyāṇādhimuttikā kalyāṇādhimuttikehi saddhiṃ saṃsandanti samenti. ... (S II, p. 154)

(釈尊)「比丘等よ、要素 (dhātu = adhimutti) ごとに⁽¹⁶⁾、衆生達は合流し、合わさっていく。**hīnādhimuttika** な衆生達は、**hīnādhimuttika** な〔衆生〕達と合流し、合わさっていく。kalyāṇādhimuttika な〔衆生〕達は、kalyāṇādhimuttika な〔衆生〕達と合流し、合わさっていく……⁽¹⁷⁾」。

上掲の記述の後、S 14.14では過去・未来・現在においても同様であることが確認される。続く S 14.15では、釈尊が高弟達を筆頭とする経行中の諸集団を指示して、例えばサーリプッタの集団は皆大慧の者達であり、モッガラナーの集団は皆神通力に秀でている等と述べ、最後にデーヴァダッタの集団は皆悪意あるものであると説き、上掲の記述を用いてまとめている。S 14.16は、乳・油・酥・蜂蜜・糖蜜がそれぞれ同じものに合流する比喻を通して上掲例に結びつける。続く S 14.17-29では、冒頭に上掲下線部があり、信・慙・愧・聞・念・慧・十善などを具える者達と具えていない者達が、各々同様の者達に合流する内容となっている (S II, pp. 154-169)。

これらの経では、dhātu ごとに或る者達が同じ者達に合流する点が共通している。S 14.14-16は一連の経の一部として説かれているものの、dhātu と同一視される adhimutti を有する衆生が合流する点が、他の経とは異なっている。それ以外の経では、衆生達は自身の有する dhātu (= adhimutti) ごとに各々信や智慧などを具え (あるいは具えずに)、同じ者達に合流するものと位置付けられているのであろう。S 14.14-16からは adhimutti を有する者が同じ adhimutti を有する者に合流していく、いわば「類は友を呼ぶ」側面を指摘できるものの、註釈は hīnādhimuttika 等を Kdh., Tat. どちら由来にも説明しており (⇒注(6))、解釈に幅が認められる⁽¹⁸⁾。

2. 論蔵以降の事例概観

論蔵以降のパーリ文献は、前節で取り上げた S 14及び如来のもつ衆生達の種々の志向性 (nānādhimuttikatā) を知る能力⁽¹⁹⁾の説明を軸に hīnādhimuttika / hīnādhimutta を使用する。以下、Pp, Vibh, Paṭis の用例の要点を列挙した上で Vibh-a を取り上げ、註釈文献の adhimutti 理解を簡潔にまとめる。

① Pp: hīnādhimutta = 悪しき習慣・性質をもつ者であって (dussīla, pāpadhamma)⁽²⁰⁾、悪しき習慣・性質をもつ者に近づき (√sev)、親しみ (√bhaj)、近侍する者 (pari-upa-√ās)⁽²¹⁾。※ Kdh., Tat. 両方に理解可能。pañitādhimutta の説明と対

② Vibh: 如来が衆生達の種々の志向性 (意向) を如実知見していること = 三世の hīnādhimuttika (劣った志向 (意向) をもつ) / pañitādhimuttika (優れた志向 (意向) をもつ) 衆生達がそれぞれ同じ者達に近づき、親しみ、近侍することを知っていること (趣意)⁽²²⁾。

③ Paṭis: 衆生達の adhimutti = ② Vibh の下線部と同じ説明⁽²³⁾

上掲 3 例は hīnādhimuttika 達、あるいは hīnādhimutta とされる者が同じ者〔達〕に近づき、親しみ、近侍する点が共通しており、先に取り上げた S 14 (用例②) の同じ adhimutti を有する者に合流していく点を受け継いでいる。①は hīnādhimutta のうちの adhimutta を「習慣」「性質」により説明する点に、②③は衆生のもつ種々の志向性や衆生達の adhimutti そのものを hīnādhimuttika / pañitādhimuttika を用いて説明する点に特徴がある。以下、上掲例のうち②に対する註釈文献を取り上げる。

Vibh-a は、② Vibh の説明中にある hīnādhimuttika を hīnajjhāsaya (劣った意向の者)⁽²⁴⁾と Kdh. 由来で理解する (Vibh-a p. 457)。hīnādhimuttika を Kdh. 由来で解する点は衆生達のもつ「種々の志向性 (意向)」に対する註釈理解に共通しており⁽²⁵⁾、中でも Vism 註は、adhimutti を優劣に分けた上で、如来

が個々の衆生の *adhimutti* の優劣とともに鋭さ・鈍さをも知ることができると考えている⁽²⁶⁾。

Vibh-a は前述の理解に続き、師や和尚とその共住者（弟子）の間柄であっても習慣（*sīla*）が合致しなければ近づくことはなく、共住者達は自分と同様の（*attano sadisa*）*hīnādhimuttika* 達のみ（*eva*）近づく、と説明している。次の引用はそれに続く部分である。

〈用例③〉

... *idam pana dussīlānaṃ dussīlasevanam eva, sīlavantānaṃ sīlavantasevanam eva, duppaññānaṃ duppaññasevanam eva, paññavantānaṃ paññavantasevanam eva ko niyāmetī ti? ajjhāsaya dhātu niyāmeti.* (*Vibh-a* p. 457)

……ではここで、何が、悪しき習慣（戒）の者達が悪しき習慣の者達のみ（*eva*）に近づくこと、よき習慣をもつ者達がよき習慣をもつ者達のみ（*eva*）に近づくこと、理解力のない者が理解力（慧）のない者達のみ（*eva*）に近づくこと、理解力のある者達が理解力のある者達のみ（*eva*）に近づくことを決定するのか？ 意向という要素（*ajjhāsaya dhātu* ≒ *adhimutti*）が決定する⁽²⁷⁾。

Vibh-a は *Vibh* 中の *adhimutti* を *ajjhāsaya*（意向）と解した上で（先述）、同じ者達のみ（*eva*）に近づくことを決定するものが *ajjhāsaya dhātu*（意向という要素）、つまり *Vibh* 中の *adhimutti* であると理解している（上掲例下線部⇒注(16), (17), (20)）。その後 *Vibh-a* は、或る村にやってきた2人の比丘が初めて出会ったにも拘わらず意気投合した話の後、「*Dhātusamyutta* (= S 14) により他ならぬこの意味が明らかにされるべきである」として、S 14.15のサーリプッタを筆頭とする集団のくだりを引用する（*Vibh-a* p. 458）。上掲例は、類は友を呼び同気相求む中（*eva*）にあって、*adhimutti* がその決め手となることを示していると言えよう。

Vibh-a は *adhimutti* を *ajjhāsaya* と解しつつ、S 14（用例②）で *hīnādhimuttika* 達等が同じ者達に合流する際の基点となっていた *dhātu* を用いることで註釈

対象である *Vibh* と S 14 を結びつけ、*adhimutti* を主体的な働きをする心的な要素（気質・性向）として説明するとともに、*Vibh* の示す同じ者達に近づく側面を、より限定的に理解している。同様の理解は、③ *Paṭis* 及び *It* 78 に対する註釈説明にも認められる（*Paṭis-a II*, p. 402, *It-a II*, pp. 65f.）⁽²⁸⁾。

3. まとめ

本研究ノートでは、パーリ文献中に使用される *hīnādhimuttika* / *hīnādhimutta* に注目し、三蔵・註釈文献それぞれにおける使用例を整理した。

聖典中の *Tat*. 由来を支持する例では、欲望を享受する境涯を含む、天界等のよき転生先が「劣ったもの」（*hīna*）として想定されている。それらの例では、人は自身が望む転生先に *adhi-vmuc* し、修習を通して、あるいは修習を止める形でそれを実現している。S 14 では *hīnādhimuttika* 等の衆生が同じ者達に合流するとされるが、*Kdh.*, *Tat*. どちら由来にも理解される。S 14 の記述は論蔵や註釈文献の事例にも受け継がれる。註釈文献では、衆生達の「種々の志向性（意向）」が *hīnādhimuttika* / *paññādhimuttika* (*Kdh.* 由来で理解) を用いて説明される。特に *Vibh-a* は、戒などを具えた者達が同じ者達のみ（*eva*）に近づくことを決定するものが *ajjhāsaya dhātu*（註釈対象である *Vibh* の *adhimutti* にあたる）であるとし、*adhimutti* を個々の衆生が有する心的要素（気質）として理解している。

パーリ文献中の *hīnādhimuttika* / *hīnādhimutta* の事例からは、劣ったものに心を向け、実現に結びついていく「心の働き」としての *adhimutti*、そして、如来がその優劣を認識でき、同類の者に近づき合流する際に主体的な働きをする、各人の持つ「気質」としての *adhimutti* を指摘できる。この2つは別のものでなく、人が抱く *adhimutti*（志向）を、心的行為と性向という異なる側面から捉えたものと考えられる。

注

- (1) 本論中のパーリ語テキストは Pali Text Society 版を底本とし、時にビルマ第六結集版 (Vipassana Research Institute (VRI) の Chaṭṭha Saṅgāyana CD の電子データ) を使用している。パーリ文献の略号は Margaret Cone, *A Dictionary of Pāli* (NPED) の略号一覧に従う。異読は必要な場合にのみ提示する。
- (2) *adhimokkha* については [水野 1964: 453-461] 及び [榎本ほか 2014 s.v. *adhimokkha*] を参照のこと。
- (3) [Benedetti 2019] は仏教文献に使用される *adhimutti* が「くっつく」(*adhere*) を意味上の出発点とすることを指摘した上で、*adhimutti* を①「志向」(*inclination*)、②「信仰」(*faith*)、③瞑想におけるもの、④変化させることのできる力 (*transformative power*) としての 4 点から考察し、一つの意味に限定して理解する危険性を指摘する。
- (4) Cf. CPD s.v. *adhimuccati* (d); [Edgerton 1953 s.v. *adhimucyate*, °ti] (2). [芳村 1987: 55-56] は尊者ピリンダヴァッチャの例を取り上げる中で、*adhimukti* を「ある事柄を心の中に描きつつ、それを精神集中によって対象として実現する心の働き」「自己の願いを具体的な姿をもって実現させる心の作用」と捉える。芳村氏の指摘は *adhimutti* の性格を考える上でも重要である。
- (5) 例えば *vyāpāda* と対置される事例: *idha brāhmaṇa ekacco cakkhunā rūpaṃ disvā piyarūpe rūpe adhimuccati, appiyarūpe rūpe vyāpajjati, ...* (S IV, p. 119) 「パラモンよ、今ここに、一部の者は眼によって色形を見て、好ましい色形に *adhi-√muc* (傾倒) し、好ましくない色形に嫌悪する……」; 註釈: *adhimuccati* ti kilesavasena adhimutto giddho* hoti. (Spk II, p. 399) 「*adhimuccati* とは、煩悩によって *adhi-√muc* (傾倒) し、貪る者となっている」*Ee omits *giddho*. Be Se に従う。
- (6) *hīnādhimuttikā* ti hīnajjhāsaya. (Spk II, pp. 139 ad. S 14.14) 「*hīnādhimuttikā* とは、劣った意向の者達」; *hīnādhimuttikā* ti lāmakajjhāsaya. (Paṭis-a II, p. 401) 「*hīnādhimuttikā* とは、劣悪な意向の者達」; *hīnādhimuttikā* ti hīne kāmaguṇādikā *adhimutti* etesan ti hīnādhimuttikā, hīnajjhāsaya. (It-a II, p. 65 ad. It 78) 「*hīnādhimuttikā* とは、欲望の劣った対象等に対する *adhimutti* (志向) がこの者達にある、ということで *hīnādhimuttikā*、劣った意向の者達である」
- (7) *paṇṭādhimuttiko* ti paṇṭe uttame maggaphale *adhimutto* ninnapoṇapabbhāro. (Mp-t(Be) III, p. 146) 「*paṇṭādhimuttiko* とは、勝れた最上の道果 (阿羅漢果) に *adhi-√muc* (志向) している、下り、傾き、傾斜する者」参考例: *paṇṭādhimuttiko* hoti nibbānādhimuttattā. (Vism-mht(Be) I, p. 349) 「涅槃に *adhi-√muc* することから *paṇṭādhimuttaka* になる」
- (8) Ee Se hīne 'dhi-; Be hīne vi-. 註釈 Ee Be vi-; Se adhi-. Ee に adhi- の異読あり (Mp

- IV, p. 126)。本例パラレル D III, p. 258 (Ee Be Se vi-. ただし異読 *adhi-*)。vi と *adhi* の交代については [Norman 2001] の Sn 第44偈に対する note (p. 165) 及び [古川 2019: n. 21] を参照のこと。複註は当該語を *adhimutta* の意味で解す: *vimuttan ti adhimuttam, ninnam poṇam pabbhāran ti atho. (Sv-pt III, p. 340, Mp-t(Be) III, p. 237) 「vimuttam とは、志向している。下っている、傾いている、傾斜という意味である」*
- (9) Ee Se omits *tatrūpappattiyā samvattati*. Mp はこれに註釈を附す。パラレル D III, p. 258 にはあり。*adhimutti* の性格理解のために重要と考え、Be 及び Mp に従い [] 付きで本文に提示する。
- (10) *hīne vimuttan ti hīnesu pañcasu kāmaguṇesu vimuttam. uttarim abhāvitam ti tato uttarim maggaphalathāya abhāvitam. (Mp IV, p. 126) 「hīne vimuttam とは、劣った五種欲へと解き放たれると (志向すると (⇒注(8))). uttarim abhāvitam とは、それからさらに道果のために修習されなければ」*
- (11) 以下の用例については [古川 2019: 31-32] においても取り上げた。
- Sunakkhatta thānam etaṃ vijjati yaṃ idh' ekacco purisapuggalo **lokāmisādhimutto** assa. **lokāmisādhimuttassa** kho Sunakkhatta purisapuggalassa tappatirūpī c' eva kathā saṅghāti, tadanudhammañ ca anuvitakketi anuvicāreti, tañ ca purisaṃ bhajati, tena ca vittim āpajjati; āneñjapaṭisaṃyuttāya* ca pana kathāya kacchamānāya na sussūsati, na sotam odahati, na aññācittam upaṭṭhapeti, na ca etaṃ purisaṃ bhajati, na ca tena vittim āpajjati. so evam assa veditabbo: **lokāmisādhimutto** purisapuggalo ti. (M II, p. 254) *Ee ānañja-; Be Se āneñja-. Be, Se に従う。
- (釈尊)「スナッカッタよ、この道理が見つけれられる。〔すなわち、〕今ここに、或る人間は世俗の利益へ **adhi-√muc** (志向) している者となるとする。スナッカッタよ、知つての通り、①世俗の利益へ **adhi-√muc** している人にはそれ (世俗の利益) に相応しい話があり、それに応じたものを思慮し、熟慮し、その [同様の] 人に親しみ、それにより喜びに踏み込む。②しかし不動に相応しい話が語られている時には [それを話している者の言葉を] 聞こうとしない。耳を傾けない。理解しようとする心を起こさず、その [不動に相応しい話を語る] 人に親しまず、それにより喜びに踏み込まない。彼は次のように知られるべきである。〔すなわち、〕世俗の利益へ **adhi-√muc** している人である」と。
- (12) [名和 2016: 15] は四無量心を「その完遂を以て修行を終えれば *brahman* 神に転生するが、そこに更に別の修行を加えることで解脱に到り得る実践修行」と位置付けるが、本例は梵天界に *adhi-√muc* する修行者によって四無量心以降の更なる修行が行われなかった事例と言える。
- (13) その他「劣ったもの」としては五種欲、「優れたもの」としては出離 (*nekkhamma*) が認められる (It-a p. 65. Cf. A III, pp. 374-379 etc.) 他、三解脱門も確認される (Paṭis

p. 97)。以下、参考例を提示する。

... samkhepato saṅkilesadhammesu abhinivīṭṭhā **hīnādhimuttikā**, vodānadhammesu abhinivīṭṭhā kalyāṇādhimuttikā. (It-a II, pp. 65-66)

…要約すれば、汚染に関する事柄に没頭しているのが **hīnādhimuttikā** (劣ったものへの志向をもつ者達) であり、浄化に関する事柄に没頭しているのが kalyāṇādhimuttikā (勝れたものへの志向をもつ者達) である。

- (14) S 14 における dhātu 理解については [水野 1964: 99-100], [山部 1987: 22-24], [平川 1988: 563-570] を参照頂きたい。
- (15) Spk II, p. 138 は S 14.13 の註釈部分で「ここから意向を「dhātu である」と示す (ito paṭṭhāya ajjhāsayaṃ dhātū ti dīpeti.) と述べた上で、注(17)のように説明を加えている (つまり dhātu ≡ ajjhāsaya ≡ adhimutti と判断される)。
- (16) パラレル It 78 の註釈理解: *dhātuso* ti dhātuto. dhātū ti ca ajjhāsaya dhātū ajjhāsaya-sabhāvo adhippeto, yo **adhimutti** ti pi vuccati. (It-a II, p. 65) 「dhātuso とは dhātu (要素) から。また dhātu とは意向という要素、意向という本性が意図されており、それは **adhimutti** とも呼ばれる」；参考例: *dhātuso* ti dhātum-dhātum pathavīādihātum visum-visum katvā. (Vism-mhṭ(Be) I, p. 428) 「dhātuso とは、それぞれの dhātu を、つまり地 [界] 等の dhātu を個別にして」
- (17) **hīnādhimuttikā** ti hīnajjhāsaya. *kalyāṇādhimuttikā* ti kalyāṇajjhāsaya. (Spk II, p. 139) 「**hīnādhimuttikā** とは、劣った意向の者達。kalyāṇādhimuttikā とは、すぐれた意向の者達」；複註: idha **adhimutti** nāma ajjhāsaya dhātū ti āha “*hīnādhimuttikā* ti *hīnajjhāsaya*” ti. (Spk-ṭ(Be) II, p. 138) 「ここで「**adhimutti** というのは意向という要素である」と人は言う、[ということ] *hīnādhimuttikā* ti *hīnajjhāsaya*」
- (18) 前経の S 14.13 では「カッチャーナよ、劣った要素を機縁として劣った表象……が生じる」(hīnaṃ, kaccāna, dhātum paṭicca uppajjati hīnā saññā, ...) と hīna と hīna がかかる語が分離している (S II, p. 154)。伝統的理解の通り dhātu ≡ ajjhāsaya ≡ adhimutti だとすれば (⇒注(15))、S 14.14 の *hīnādhimuttika* もまた、Kdh. 由来の Bv. で理解可能かもしれない。対して、注(1)に示した M 105 の用例下線部①では、世俗の利益等に adhi-√muc した者が同じ者に親しんでいる (vbjaj ⇒ 2 に提示する諸例)。本例は hīna を用いる例ではないが、Tat. 由来で使用される **adhimutti** を抱く者が、同じ者に親しむ例が認められる点は指摘しておきたい。
- (19) ... Tathāgato sattānaṃ **nānādhimuttikatam** yathābhūtam pajānāti. (M I, p. 70, A V, p. 34 etc.) 「……如来は衆生達の種々の志向性をありのままに理解している」
- (20) **hīnādhimutto** ti hīnajjhāsaya. *dussīlo* ti nissīlo. *pāpadhammo* ti lāmakadhammo. (Pp-a p. 206) 「**hīnādhimutto** とは劣った意向の者。dussīlo とはよき習慣のない者。pāpadhammo とは劣悪な性質をもつ者」

- (21) *katamo ca puggalo hīnādhimutto?* idh' ekacco puggalo dussīlo hoti pāpadhammo, so aññaṃ dussīlaṃ pāpadhammaṃ sevati bhajati payirupāsati: ayaṃ vuccati puggalo **hīnādhimutto**. (Pp p. 26)
- (22) *tattha katamaṃ Tathāgataṃ sattānaṃ nānādhimuttikatam* yathābhūtam aññaṃ? idha Tathāgato pajānāti: santi sattā **hīnādhimuttikā**, santi sattā paṇitādhimuttikā. **hīnādhimuttikā** sattā **hīnādhimuttike** satte sevanti bhajanti payirupāsanti. paṇitādhimuttikā sattā paṇitādhimuttike satte sevanti bhajanti payirupāsanti, ... (Vibh p. 339)
- (23) *katamā ca sattānaṃ adhimutti?* santi sattā **hīnādhimuttikā**, santi sattā paṇitādhimuttikā. **hīnādhimuttikā** sattā **hīnādhimuttike** satte sevanti bhajanti payirupāsanti, paṇitādhimuttikā sattā paṇitādhimuttike satte sevanti bhajanti payirupāsanti. ... ayaṃ sattānaṃ adhimutti. (Paṭis I, p. 124)
- (24) ajjhāsaya (意向) はパーリ聖典の段階から用いられるが、註釈以降 adhimutti の説明に頻用されるようになる。ajjhāsaya の類語である āsaya と adhimutti の併用は Nidd I 以来確認できる (Nidd I, p. 179 etc.)。
- (25) *nānādhimuttikatan* ti **hīnādīhi adhimuttihi** nānādhimuttikabhāvaṃ. (Ps II, p. 29) 「nānādhimuttikatam とは、劣った [・すぐれた] 等の **adhimutti** の点で種々の adhimutti をもつ状態を」その他 Mp V, p. 14, Vibh-a p. 401, Paṭis-a III, p. 628 も同様の理解を示す。
- (26) *adhimutti* ajjhāsaya dhātū. sā duvidhā **hīnādhimutti** paṇitādhimutti ti. yāya **hīnādhimuttikā** sattā **hīnādhimuttike** yeva sevanti, paṇitādhimuttikā ca paṇitādhimuttike yeva. sā ajjhāsaya dhātū ajjhāsayasabhāvo adhimutti. tam *adhimuttiṃ jānāti* “imassa adhimutti hīnā, imassa paṇitā” ti. tatthā pi “imassa mudu, imassa mudutarā, imassa mudutamā” ti ādinā. indriyaṇaṃ hi tikkhamudubhāvādinā yathārahaṃ adhimuttiyā tikkhamudubhāvādikō veditabbo. (Vism-mhṭ(Be) I, p. 240) 「adhimutti は意向という要素である。それは **hīnādhimutti** と paṇitādhimutti の 2 種である。それによって **hīnādhimuttika** (劣った志向 (意向) をもつ) 衆生達が **hīnādhimuttika** (劣った志向 (意向) をもつ) [衆生] 達だけに近づき、paṇitādhimuttika 達が paṇitādhimuttika 達だけに [近づく]、その意向という要素、意向という本性が adhimutti である。その adhimutti を [如来は] 知っている。「この者の adhimutti は劣っている。この者の [adhimutti] は優れている」と。同様に「この者の [adhimutti] は鈍い、この者の [adhimutti] はより鈍い、この者の [adhimutti] は最も鈍い」等とも [知っている]。というも、諸機能の鋭い・鈍い状態等の者 (Cf. Vin I, p. 6) とともに、適宜 adhimutti の鋭い・鈍い状態等の者が知られるべきであるので」
- (27) 参考例: *tattha-tattha ye-ye sattā yaṃ-yaṃ adhimuttikā*, te-te tamtadadhimuttike eva sevanti bhajanti payirupāsanti, dhātusabhāgato. (Ps-ṭ(Be) II, p. 23) 「それぞれのケースでそれぞれの **adhimutti** をもつ衆生達、その者等がそういうそれぞれの **adhimutti** を

もつ衆生達のみ近づき、親しみ、近侍する。要素が共通であるが故に」

(28) その他、衆生の抱く意欲の優劣は *adhimutti* に左右される（下の用例参照）。

hīnādhimuttika は怠惰な者の他 (Ja-a I, p.179, It-a II, p. 66)、邪な実践をする者 (*micchāpaṭipanna*) と併用される (Spk I, p. 298, II, p. 169)。

hīnādhimuttivasena *chandādīnam pi hīnatā. paṇītādhimuttivasena paṇītatā.* (*Vism-mhṭ*(Be) I, p. 34)

hīnādhimutti の力により意欲等も劣ること〔になり〕、*paṇītādhimutti* の力により優れていること〔になる〕。

参考文献

- 榎本文雄, 河崎豊, 名和隆乾, 畑昌利, 古川洋平 2014 『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語』 東京: 山喜房佛書林.
- 櫻部建 1997 『増補版 佛教語の研究』 京都: 文栄堂書店.
- 名和隆乾 2016 「パーリ聖典における四無量心の予備的研究: 四無量心と涅槃の関係について」 『真宗文化』 25, pp. 1-21.
- 平川彰 1988 『法と縁起』 平川彰著作集第一巻, 東京: 春秋社.
- 古川洋平 2019 「パーリ文献中の *saddhādhimutta* について: 第一人者の伝承に基づく訳語の検討」 『パーリ学仏教文化学』 33, pp. 21-38.
- 水野弘元 1964 『パーリ佛教を中心とした佛教の心識論』 東京: 山喜房佛書林.
- 山部能宣 1987 「初期瑜伽派に於ける界の思想について——*Akṣarāsīsūtra* をめぐって」 『待兼山論叢 哲学篇』 21, pp. 21-36.
- 芳村博実 1987 「信解 (*Adhimukti*) の対象となる仏陀 (*Buddha*)」 『日本仏教学会年報』 53, pp. 51-66.
- Benedetti, Giacomo. 2019. "The Etymology and Semantic Spectrum of *adhimukti* and Related Terms in Buddhist Texts", *Buddhist Studies Review*, 36, 1: 3-30.
- Edgerton, Franklin. 1953. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, Vol. II, Dictionary, New Haven: Yale University Press.
- Horner, I. B. 1959. *The Collection of the Middle Length Sayings (Majjhima-Nikāya)*, vol. 3, Oxford: Pali Text Society.
- Norman, K. R. 2001. *The Group of Discourses (Sutta-Nipāta)*, 2nd ed., Oxford: Pali Text Society.